

生野高校、松原移転50年

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)

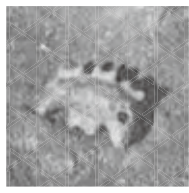


▲「五綱領」碑

奈良県十津川村産の輝緑凝灰岩。昭和7年卒業の日展委嘱、中川雨亭による揮毫。



▲河内松原駅前に掲げられた「松原市移転50周年」横断幕(平成31年3月、生野高校提供)



▲出土した子持勾玉



▲校舎予定地(新堂1丁目)

農道の正面に農作業小屋があり、「建設用地」の白い表示板も建つ。



▲移転前の松原校舎地(点線内)

昭和41年ごろ。点線北(上)側が松原中学校。東(右)側の池が下の池(現松原小学校)。

3点はいずれも大阪府立生野高校「六十年史」(昭和55年)より転載。

縄文時代晩期から古墳時代の
新堂遺跡の地。一〇〇年の歩み

新堂一丁目にある大阪府立生野高校は、今から九十九年前の大正九年(一九二〇)四月、大阪府立第十二中学校として開校しました。高津中学校現高津高校)の校舎を借りてのスタートでした。同年七月、東成郡生野村(現生野区)に校地を買収し、翌十年四月、大阪府立生野中学校(昭和二十三年より生野高校)と改称しました。

昭和四十年(一九六五)、校内では生野区南生野町の校地が狭く、校舎の施設も改善すべき所も多かったことから、校舎移転の構想が出されました。その後、移転先として同じ生野区や東住吉区その他、羽曳野市や松原市などの候補地があげられました。翌四十一年、本市の積極的な誘致もあって、生野区を離れ、新堂への移転が決まり、同年十二月に現校地の買収が完了したのでした。

昭和四十三年(一九六八)三月、新校地の地鎮祭が行われ、六月には新校舎の起工式も挙行されました。翌四十四年三月、新校舎第一期工事が完了し、四月から松原校舎での授業が始まったのです。それに先だち、入学式や始業式は北隣の松原中学校講堂を借りて行われました。新築工事はその後も第二期、第三期と続けられ、体育館・プールなど全工事が完了したのは昭和四十六年のことでした。本年は松原移

転、五十年の記念の年にあたります。

移転一年後の昭和四十五年には、創立五十周年でしたので、新校地の正門から玄関に至る通路脇に生野の建学の精神である剛健・質実・自重・自治・至誠の「五綱領」の碑も建てられました。さて、松原校舎が建設・整備されるまで、同地は一面の田畑でした。校地面積は、約二〇・〇〇〇m²で、旧生野校舎の約二倍。建坪でも約一・五倍に達しました。新堂地区と同地区に隣りあう反正山地区(現上田五丁目)の農家の方々の土地が大半でした。

現在、生野高校生の多くが近鉄河内松原駅から、松原幼稚園や松原小学校前を通って通学する道は、古道の中高野街道です。平安時代以降、京都・大坂方面から高野山(和歌山県)に向かう古道の一つでした。松原小学校の地はもともと下の池とよぶため池で、昭和四十七年に池を埋め立て、河内松原駅から移転してきました。

生野高校東門へは、松原小学校正門前から分かれて道が延びていますが、同道は下の池の土堤から田畑につながる農道でした。今の校舎玄関あたりに農作業小屋がありました。私は、中高野街道沿いの反正山地区で生まれ、まわりの農家の方々の田畑が現校地に買収されましたが、街道から農道を通じて農作業小屋までを往復するのが散歩コースでした。校地に決定したことを受け、農作業小屋の東側手前の農道沿いに「生野高等学校建設用地」と書かれ

た巨大な表示板が建てられていたことを、今も覚えていています。

昭和五十三、五十四年(一九七八、七九)、これまで以上に中学校卒業者が増加しました。各高校でも学級数の増設が図られ、同校でもそれに合わせる過程で浄化槽設備工事が行われることになりました。校地北側、松原中学校側に近い場所です。

同地は、五世紀前半、十八代反正天皇が王宮としたとされる丹比柴籬宮の伝承地の一角でしたので、大阪府教育委員会では、発掘調査を行いました。とくに沖積段丘面にあたる地層からは、今から三〇〇年前後前の縄文時代晩期の南北溝が検出され、また古墳時代に作られたと思われる祭祀具の子持勾玉も出土しました。子持勾玉は当時、河内地方で三例目の出土として話題となりました。同時に、同発掘地から東五〇mのプール西側でも時期不詳ですが、南北溝が検出され、古代における開発の一端が垣間見られたのでした。

その後、同遺跡地はより広範囲に新堂遺跡として認知されました。平成十七年(二〇〇五)には、校地正門から西に数十mの地点で、縄文時代晩期の火熱を受けた焼土塊がまとまって出土し、つづく弥生時代中期の土器片なども検出され、人々の営みが確認されました。悠久の遺跡地に建つ同校は、本年、五十年もの松原での歴史を重ねながら、来年の令和二年(二〇二〇)、開校一〇〇年を迎えようとしています。